Memoirs of Beppu University ,45(2003)

可能表現の変遷

～大分郡挾間町の３世代～

松　田　美　香

１．はじめに

大分県方言の可能表現は、いわゆる共通語に比べるとやや複雑な様相を呈している。九州方言では「能力可能」と「状況可能」に２区分される地域が広がっているが、その中でも珍しく、大分県下では３区分されることが糸井・種・日高（1977－1991）[1]等の先行研究によって明らかにされている。この可能表現の３項対立[2]とは、可能表現の意味「～することができる」「～することができない」という可能・不可能を表す形式が、意味の下位区分（可能／不可能の理由づけ）によって以下の図のA，B，Cのように３つに分かれ対立することを表す。

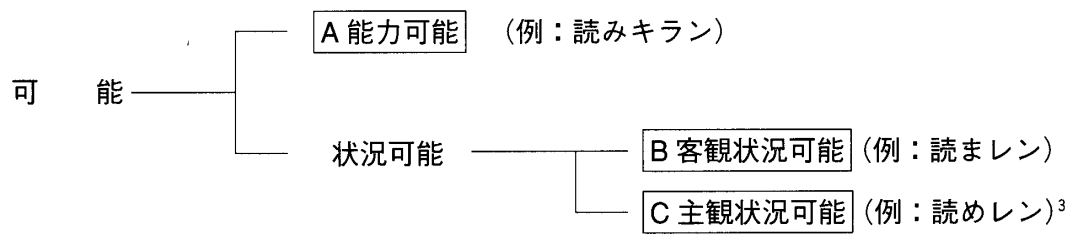


図１　日高・種（1991）における可能表現の区分

A，B，Cの説明は、以下の通りである[4]。

「A　自分にそうするだけの能力が備わっていないために、読むことが不可能だ」

「B　本当は読む能力を持っているのだが、状況が不十分なので、読むことが不可能だ」

「C　前段部分の根拠が話し手の主観的な判断に基づく理由であって、もう読みたくない・読む意欲がわかない」

しかし、現在この３項対立が行われているかの、その後の同一地域での追跡調査はされていない。

ところで、可能表現について、渋谷勝己（1993）[5]では、「可能の条件スケール」を設定している（図２）。可能表現における可能・不可能の条件について、左方は可能の条件が動作主体内部に向かい、右方は可能の条件が動作主体外部に向かう構造である。このような考えを反映し、「主観状況可能」を「内的条件可能」、また「客観状況可能」を「外的条件可能」と名づけている。本稿も適宜この呼び方に倣う。

1　種友明・糸井寛一（1977）「大野川流域における可能表現」大分大学教育学部『大野川～自然・社会・教育～』
日高貢一郎・種友明（1981）「大分県津江地方の可能表現」『大分大学教育学部研究紀要』大分県津江地域特集
日高貢一郎（1991）「九州方言の可能表現」『大分県史　方言篇』（246～247p）

2　拙稿（2001）「地域から発する可能表現の３区分化」『地域社会研究』第４号所収

3　読めレレンとも

4　日高（1991）による。実際に多様されるのは否定形が多いため、否定形を用いて説明している。

5　渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第１分冊32頁

←――動作主体内部条件　　動作主体外部条件――→
心情・性格――能力（先天的・後天的）――内的――外的――外的強制

図２　渋谷勝己（1993：32）可能の条件スケール

このスケールに沿って考えれば、大分県の可能表現では中央の内的条件可能が独立した１区分をなすことになる。

２．調査の目的

今回の調査は、平成14年６月に行われた可能表現調査（九州方言研究会・九州各地点他）の中間報告に引き続き、問題になった点を改変して大分県大分郡挾間町で行ったものである。まず、先行研究が明らかにした可能表現の３項対立があるか否かを探るのが第１の目的である。また、なお調査を進めるためにはどのような留意点・工夫すべき点があるのかも明らかにしようとした。

３．調査の方法・調査票

3-1.　調査日時　　平成14年（2002年）12月25日～27日
3-2.　被調査者　　①　1932年８月１日生・当時70歳・男性（無職・もと建築業）
　　②　1954年12月１日生・当時48歳・男性（役場職員）
　　③　1967年３月８日生・当時35歳・男性（役場職員）
3-3.　話者の生育地　いずれも大分県大分郡挾間町
　　（③のみ大学生として４年間香川県に外住暦あり）
3-4.　調査の方法　　面接による臨地調査
3-5.　調査票　　省略[6]
3-6.　調査票の一部改変
渋谷勝己（1993）で「心情・性格」とあるが、「性格」と「その人の性格や行動癖・態度や振る舞い」を意味する「性向」[7]という名称に変更した。以降は、「心情・性向」として扱う。

6　拙稿（2002）「大分方言における可能表現－意味構造に関する一考察－」『別府大学短期大学部紀要』第21号52－53p. 参照。なお、その後調査項目が増え、今回の質問項目は111である。
7　室山敏昭（2002）『「ヨコ」社会の構造と意味－方言性向語彙に見る－』和泉書院　2p.

4．調査結果

調査結果を「意味×形式」の表にした（表１～３）。凡例は次の通り。

●：キル／キラン	例１	書きキル／書きキラン	例２　食べキル／食べキラン
□：（ラ）レル・ルル／（ラ）レン		書かレル（書かルル）／書かレン	食べラレル／食べラレン
◆：可能動詞（子音語幹動詞のみ）		書ケル／書ケン	……
☆：ラ抜き可能形（母音語幹動詞のみ）		……	食べレル(食べルル)／食べレン
★：可能動詞の語幹十(レ)レル/(レ)レン（子音語幹動詞のみ）		書ケレル／書ケレン（書ケレレン）	……
デ：コト（ワ）デキル／デキン		書くコト(ワ)デキル／デキン	食べるコト(ガ)デキル／デキン
D：デキル系		デキル、デクル／デキン、デケン	
S：ダサン		／書きダサン	／食べダサン
オ：オーセン系		／書きオーセン	／食べオーセン

表１′～３′は、以下の計算によって、当該意味におけるそれぞれの形式の使用率を出したものである。

例　　70歳男性の

能力可能における●（キル系）使用の割合＝ $\dfrac{14\text{（能力可能の●の数）}}{36\text{（能力可能の全回答数）}}$ ＝ 38.9%

4-1. 大分県大分郡挾間町の可能表現形式～挾間町３世代～

表　1	①挾間町　70歳　男						
	●	◆	★	☆	□	その他	回答数
心情・性向	14	1	8	0	5	8	36
能　力	14	4	8	1	4	6	37
内　的	2	1	7	7	4	4	25
外　的	2	1	5	1	30	7	46

表　2	①挾間町　48歳　男						
	●	◆	★	☆	□	その他	回答数
心情・性向	28	0	2	0	2	3	35
能　力	23	0	1	0	0	0	24
内　的	10	2	6	0	10	10	38
外　的	3	0	2	0	33	3	41

表　3	①挾間町　35歳　男						
	●	◆	★	☆	□	その他	回答数
心情・性向	23	9	5	0	0	0	37
能　力	21	5	1	0	2	4	33
内　的	11	12	6	0	1	1	31
外　的	2	22	8	8	16	1	57

表　1´	①挾間町　70歳　男						
	●	◆	★	☆	□	その他	回答数
心情・性向	38.9%	2.8%	22.2%	0.0%	13.9%	22.2%	36
能　　力	37.8%	10.8%	21.6%	2.7%	10.8%	16.2%	37
内　　的	8.0%	4.0%	28.0%	28.0%	16.0%	16.0%	25
外　　的	4.3%	2.2%	10.9%	2.2%	65.2%	15.2%	46

表　2´	①挾間町　48歳　男						
	●	◆	★	☆	□	その他	回答数
心情・性向	80.8%	0.0%	5.7%	0.0%	5.7%	8.8%	35
能　　力	95.8%	0.0%	4.2%	0.0%	0.0%	0.0%	24
内　　的	26.3%	5.3%	15.8%	0.0%	26.3%	30.3%	38
外　　的	7.3%	0.0%	4.9%	0.0%	80.5%	5.1%	41

表　3´	①挾間町　35歳　男						
	●	◆	★	☆	□	その他	回答数
心情・性向	62.2%	24.3%	13.5%	0.0%	0.0%	0.0%	37
能　　力	63.6%	15.2%	3.0%	0.0%	6.1%	12.1%	33
内　　的	35.5%	38.7%	19.4%	0.0%	3.2%	3.2%	31
外　　的	3.5%	38.6%	14.0%	14.0%	28.1%	1.8%	57

4-2.　「その他」にあらわれた形式　　＜　　＞は質問文。

4-2-1.　動詞の肯定系・否定形をとるもの

（1）ゲンカンガ　アカラン　コマッタノー　カギー　ドゲー　シタカノー
＜鍵をなくしたので玄関をあけることができない＞　(70歳男性)

（2）アンクレー　ベンキョー　シタンジャケー　ゴーカクスルジャロー
＜あれだけ勉強したんだから、あしたは絶対試験に合格することができる＞
(48歳男性)

4-2-2.　～コナサン・～ダサンという形式

（3）ショワシー　シゴトガ　デキチ　イキダサンジャッタ(誘導)／イッコナサンジャッタ
＜きのうは思いもよらない雑用が入ってきて、忙しくて、結局郵便局には行くことができなかった＞　(70歳男性)

（4）セワシュージカラ　ヨミコナサンヤッタ
＜あの本は時間がなくて最後まで読むことはできなかった＞　(70歳男性)

4-2-3.　～コトワ　デキル（デクル）・デキンの形をとるもの

（5）キンチョー　シチ　ハナスコトワ　デケン／ハナシキラン
＜いつもすごく緊張してしまうから、人前で話すことはできない＞　(48歳男性)

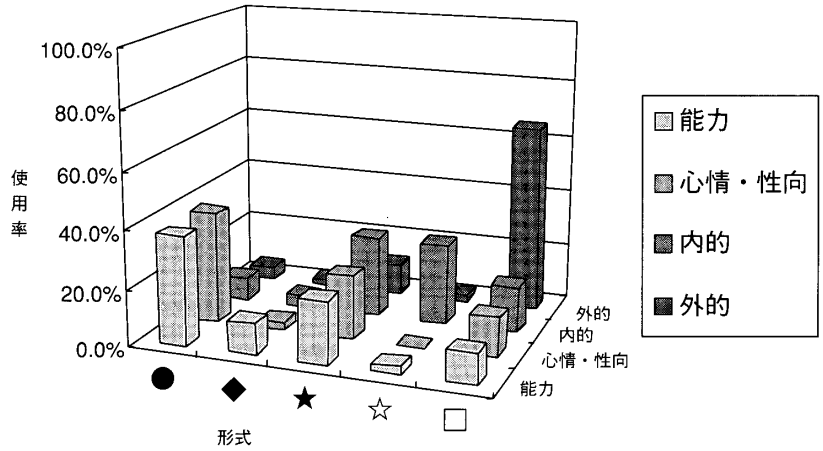
4-2-4.　～オーセン（ヨセン）という形式

（6）ジカンガ　ネーケン　ドーシテモ　イキヨセン(誘導･古い)
＜時間がなくて行くことができない＞
(35歳男性)

以下に、大分県大分郡挾間町の３世代（男性70歳・48歳・35歳）の可能表現（意味×形式）のグラフを作成した（図３～５）。先行研究の報告通り、可能表現において３項対立があるのなら

ば、「能力（心情・性向）」／「内的」／「外的」を担当するそれぞれの高い柱が、異なる形式（異なる記号・・・●、◆、★、□のどれか）の部分に高く立つはずである。

図３　①大分郡挾間町70歳男性



凡例

●：キル／キラン

□：（ラ）レル・ルル／（ラ）レン

◆　：可能動詞（子音語幹動詞のみ）

★：可能動詞の語幹＋（レ）レル／（レ）レン（子音語幹動詞のみ）

☆：ラ抜き可能形（母音語幹動詞のみ）

デ：コト（ワ）デキル／デキン

D：デキル系

S：ダサン

オ：オーセン系

※：普通の動詞

図４　②大分郡挾間町48歳男性

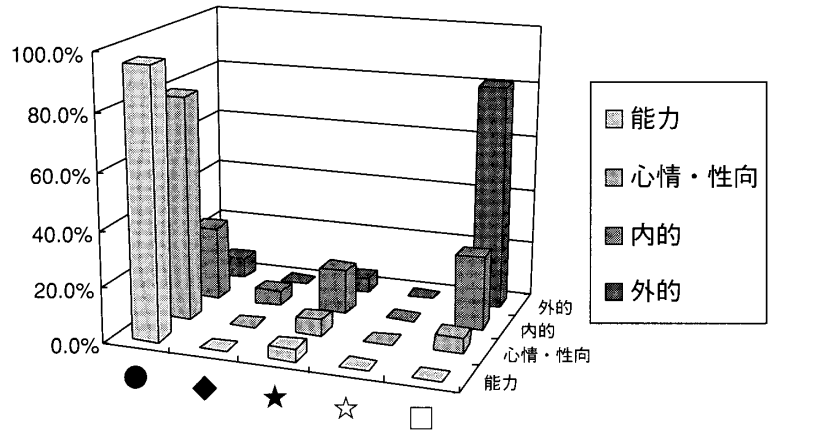
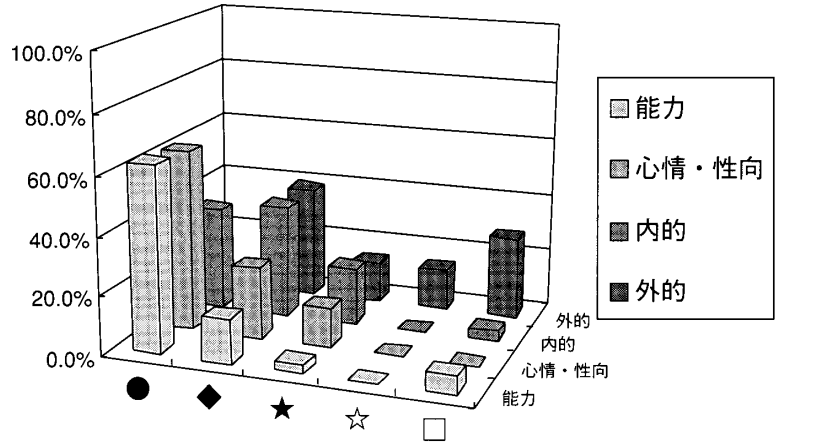


図５　③大分郡挾間町35歳男性



5．考察

結果から世代差が見て取れる。特に、◆、★、☆の変化が激しい。

5-1.　形式別使用率の分布

a．●（－キル／キラン）

「能力」・「心情・性向」を表している。70歳男性より48歳男性の方がその傾向は顕著であるが、35歳男性では「内的」も表していて、意味領域が広がっていることがわかる。

b．□（－（ラ）レル／（ラ）レン）

「外的」を表す。48歳男性では「内的」を表す役割もしていた。35歳男性ではこの形式の使用が減っている。

c．◆可能動詞形

70歳男性と48歳男性では、ほとんど使用されていないが、35歳男性では、主に「外的」「内的」を表す役割をしている。「能力」・「心情・性向」を表す場合も少なくない。なお、48歳男性から「可能動詞形は女性のことば」という内省を得た。全国と大分県の可能動詞形の分布とを合せて考えてみると、「書クル」「飲ムル」という下二段活用する古くからの可能動詞形が衰退し、「書ケル」「飲メル」といった共通語としての可能動詞が流入してきた時期とこの世代の言語習得期（3～12歳）が重なり、当時ことばの流行に敏感と言われる女性がよく使っていたのであろう。そのため、この世代の男性では可能動詞全体の使用が抑制されたと考えられる。

70歳男性の★の分布と35歳男性の◆の分布が似ている。大分方言に◆が古くから存在したことは、下二段活用することからも明らかであるから、◆から★への形式変化が生じたこと、その後、共通語としての◆が入ってきたことが推測できる。

d．★可能動詞の語幹＋（レ）レル／（レ）レン（子音語幹動詞のみ）

70歳男性では全体的に使われていて、中でも「内的」の役割が他よりやや高い。その傾向は48歳男性が顕著である。35歳男性では「能力」をほとんど表さない結果になった。

e．☆ラ抜き可能形（母音語幹動詞のみ）

今回の調査票では母音語幹動詞の割合が子音語幹動詞に比べて低かった（後掲表4，5を参照）ため、数値自体が低い。しかし、分布はまとまっており、70歳男性はもっぱら「内的」を表している。48歳男性では使用がない。そして35歳男性ではもっぱら「外的」を表しており、ここに世代差を見ることができる。

以上、形式別に使用の世代差を見た。その結果、可能動詞（◆）とラ抜き可能形（☆）の意味に変化があったことが推測される。まず、可能動詞は先行研究などからも「能力」から「内的」へ、そして若年層ではこのような区分ではなく、一様に使われるようになっている。さらに☆は「内的」から「外的」へと表す意味が移っていったことが読み取れる。

48歳男性のグラフを見ると、この世代では●「能力」と□「外的」の2区分がはっきりしており、「内的」と設定した意味の一部を★が担っていることは確かである。

【48歳男性の★（可能動詞の語幹＋（レ）レル／（レ）レン）】

（7）キョー　タイチョーガ　ワリーケン　モー　イケレン

＜今日は体調が悪くて（仕事に）行くことができない＞

（8）キョー　ヒジージ　オヨゲレン　　＜今日は気分が悪いから泳ぐことができない＞

（9）キノー　アン　ヤミー　ノボロート　オモーチョッタンヤケド　ヒジージ　ノボリキランカッタ／ノボレレンカッタ　＜きのうあの山に登ろうとして途中まで行ってみたけど、体力がなくて（頂上までは）行くことができなかった＞

（10）ダンダン　キズガ　イトゥナッチ　オヨギキランカッタ／オヨゲレンカッタ
＜途中で痛みが増してきて、そのまま泳ぎ続けることができなかった＞

（11）オズナッチ　モー　コレイジョーワ　イケレン／ワタレレン／ワタリキラン
＜（流れの急な川を途中まで渡りながら）、こわくて向こうまで渡ることができないよ＞

（12）キョーワ　モー　ヒズーナッタケン　カケン／カケレン（誘導）
＜今日は疲れていて、（夜までには論文を）書き上げることができない＞

このように、★が意味する領域は体調・気分・体力・気力による不可能であり、恒常的な要素ではない場面設定がほとんどである。今回の調査では怪我（ケガ）も「内的」に含めて調査したが、そのような場合の48歳・男性の回答は□「オヨガレン」であった。

次に、「内的」を担当する形式の世代差について、見てみることにする。

5-2.　「内的条件可能」を担当する形式の変遷　－挾間町の３世代の比較－

5-2-1.　客観的にはわからない非恒常的な状況による可能・不可能

（13）キョー　ヒズージ　イケレン
＜今日は体調が悪いから（仕事に）行くことができない＞　世代①★

（14）キョー　タイチョーガ　ワリーケン　モー　イケレン　（13）に同じ　世代②★

（15）キョーワ　タイチョーガ　ワリーケン　シゴト　イキキラン（13）に同じ　世代③●

（16）キノーワ　ヨダキージカラ　シゴトニ　イケレンヤッタガ
＜きのうは体調が悪くて仕事に行くことができなかった＞　世代①★

（17）キノーワ　タイチョーガ　ワルカッタケン　シゴト　イケレンカッタ
（16）に同じ　世代②★

（18）キノーワ　イッキランカッタナー　（16）に同じ　世代③●

（19）キョーワ　モー　ヨダキージカラ　カケレン
＜今日は疲れていて、夜までには論文を書き上げることができない＞　世代①★

（20）キョーワ　モー　ヒズーナッタケン　カケン／カケレン（誘導）
（19）に同じ　世代②◆／★

（21）キョーワ　キチーケン　ロンブンワ　カキキランナー／カケレン（誘導）
（19）に同じ　世代③●／★

世代①と②は、体調・体力（気力）がすぐれないという、客観的にはわからない非恒常的な状況による不可能を表す形式が★になっている。しかし、③35歳・男性では●である。

5-2-3.　客観的にわかる非恒常的な状況による可能・不可能

（22）オレワ　モー　アシガワリージナ　イケレン／アベレン
＜私は足をケガしていてあしたは泳ぐことができない＞　世代①★／☆

（23）アシ　ケガシチョンケン　オヨガレンジャロー　（22）に同じ　世代②□

（24）アシオ　ケガシチョンケン　オヨゲンヤローナー　（22）に同じ　世代③◆

(25) アベヨッタンジャケンド　カダラガ　ダルーナッチカラモー　アベレンヤッタ
＜途中で痛みが増してきて、そのまま泳ぎ続けることができなかった＞　世代①☆
(26) ダンダン　キズガ　イトゥナッチ　オヨゲレンカッタ　(25) に同じ　世代②★
(27) サイゴマデ　オヨギキランカッタ　(25) に同じ　世代③●

(23) の世代②がオヨガレンになるように、「足をケガしている」「ものもらいができて」など、客観的に理解できる体内のこと状況の場合は、3世代の形式が異なってくる。

(28) タローワ　アシュー　ケゴーシチョンケン　ミズー　アビラレメー
＜太郎は足をケガしていて泳ぐことができまい＞　世代①□
(29) タローワ　アシー　ケゴーシチョンケン　オヨガレン　(28) に同じ　世代②□
(30) タローワ　アシケガシチョッテ　オヨゲンノジャナー／オヨゲレンノジャナー
(28) に同じ　世代③◆／★
(31) ワシャー　メモライガ　デキチカラ　ミズニ　イラレン
＜今ものもらいができていて泳ぐことができない＞　世代①□
(32) メモライ　デキチョンケン　オヨガレン　(31) に同じ　世代②□
(33) メモライ　デキチョンケン　オヨゲレンナー　(31) に同じ　世代③★

大変興味深いことに、上の2世代で□、若い世代③で★である。ここからも、①②の世代と③の世代では形式と意味の関係が異なってきていることがわかる。

5-3.　主情性（発話主体の強い感情を帯びる表現）の有無　－若年層の★－

若い世代③の (21) は誘導によって★を答えている。話者の内省としては、「古い」という感覚もあり、また「自分は書きたいのに・・・という気持ちが入っている」と答えた。したがって以下のような場合、

(34) キノー　オヨゲタンヤ
＜きのう（勇気を出してやってみたら）泳ぐことができた＞　世代③◆
(35) キノー　ハジメテ　オヨゲレタンヤー
(34) に同じ　初体験の場合　③★
(36) カミガ　ネーケン　アー　カケレンヤンカー　カキタイノニー
＜（原稿用紙がなくなったから、夜までには論文を）書き上げることができない。書きたいのに・・・。＞　③★

「内的」ではなくても、「初体験」や「本当は書きたいのに」などの発話主体の強い喜びや残念な気持ちを読み込んでいる場合には、★が使われるのである。

5-4.　★と☆の関係の変遷

(37) ヒズージ　アベレン　＜（今日は）気分が悪いから泳ぐことができない）　世代①☆
(38) キョー　タイチョーガ　ワリーケン　オヨゲレン　(37) に同じ　世代②★
(39) キブンワリーンヤ　オヨゲンノヤー　(37) に同じ　世代③◆

以下に、回答された動詞の活用と意味の関係を調べて表にまとめた。（表4、5）

可能表現動詞　活用の種類×意味の分布

表4

①70歳男性	子音語幹動詞	母音語幹動詞
外　的	23	12
内　的	14	10
能　力	16	5
心　情	19	3
性　向	2	1

表5

②48,③35歳男性	子音語幹動詞	母音語幹動詞
外　的	23	13
内　的	21	0
能　力	18	4
心　情	22	2
性　向	2	1

表4は世代①（70歳・男性）、表5は世代②（48歳・男性）と世代③（35歳・男性）の使用動詞を活用別にした表である。表5を見ると、「内的」の母音語幹動詞の例が0だが、表4の世代①を見ると、以下のように内的において母音語幹動詞を使用すれば☆「語幹＋レン」になって回答されていることがわかる。したがって、(37) のように世代①の☆は、★に対応する形式として「内的」を表す形式となっていることがわかる。また、表4のように「内的」に母音語幹動詞の使用が無いために、世代②では☆の回答が無かったのであろう。

【70歳男性の☆ラ抜き可能形（母音語幹動詞のみ）】

(40) ヒズージ　アベレン
＜（今日は）気分が悪いから泳ぐことができない＞　世代①☆

(41) アシュー　ケゴー　シチー　アベレン
＜（私は）足をケガしていて泳ぐことができない＞　①☆

(42) アントリワ　ケガオ　シチョッチカラ　アベレンノヤロー　①☆
＜あの白鳥は足をケガしていて泳ぐことができない＞

(43) オレワ　モー　アシガワリージナ　イケレン／アベレン　①★／☆
＜私は足をケガしていて（あしたは）泳ぐ（泳ぎに行く）ことができない＞

(44) キョー　チョーシガヨカッタケン　アベレタ
＜今日は体調がよくて（1キロ）泳ぐことができた＞　①☆

(45) ヤッパ　イトージ　アベキランヤッタ／アベレンヤッタ　①●／☆
＜（ケガをしていながら水に入って泳ごうとしてみてうまくできずに）やっぱり痛くて泳ぐことができなかった＞

一方、35歳男性の☆は図5を見ればわかるように、「外的」しかない。

【35歳男性の☆ラ抜き可能形（母音語幹動詞のみ）】

(46) イソガシクテ　ネレンノヤ／ネラレン（誘導・古）　③☆／□
＜忙しくて（10時前にはなかなか）寝ることができない＞

(47) イソガシクテ　エーガ　ミレンノヤナー
＜（忙しくて）映画を見ることができない＞　③☆

(48) アシタ　イソガシクチ　ジュージマエニワ　ネレンヤローナー
＜（あしたは忙しくて）10時前に寝ることはできない＞　③☆

(49) カギ　ナクシタケン　アシタ　キンコワ　アケレンヤローナー／アケラレン③☆／□
＜（鍵をなくしたので）あしたは金庫はあけることができない＞

(50) アー　アシタ　ハヤクオワルケン　ジュージマエニ　ネレルンカー　③☆
＜あしたは（仕事が早く終わるから）10時前に寝ることができる＞

(51) キョー　カギ　モラッタケン　アシタ　アケレルンヤナー／アケラレル（宝物の箱な

どなら）　③☆／□

＜（今日鍵をもらったから）あしたはあけることができる＞

(52) サビチョッタケン　チョット　アケレンカッタ　③☆

＜（さびついてあかないドアをあけようと試みて）あけることができなかった＞

世代①、②では客観性のない条件を★☆が担当していたが、世代③では客観性のある状況可能へも使用が広がっている。これは5-3.で述べたように、使い分けの基準が上の世代と異なり、発話主体の感情移入の有無で★を使い、□のら抜き形（ラレル→レル）として☆を使うようになってきているからである。また、全体的に◆が使用されているのは、共通語の影響であろう。

6．まとめ　3世代における可能表現の変遷

図6　心情・性向による可能　挟間町3世代

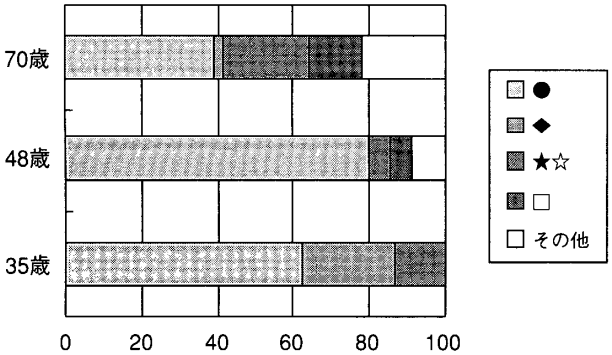


図8　内的条件可能　挟間町3世代

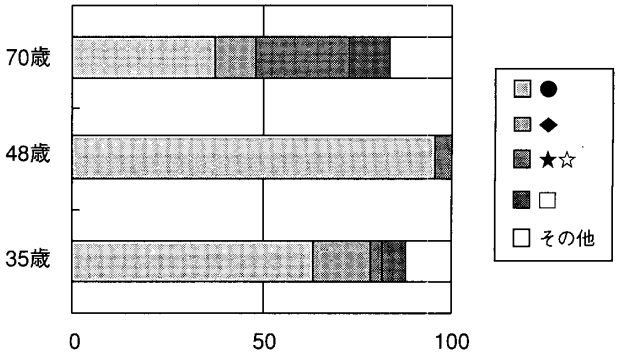


図7　能力による可能　挟間町3世代

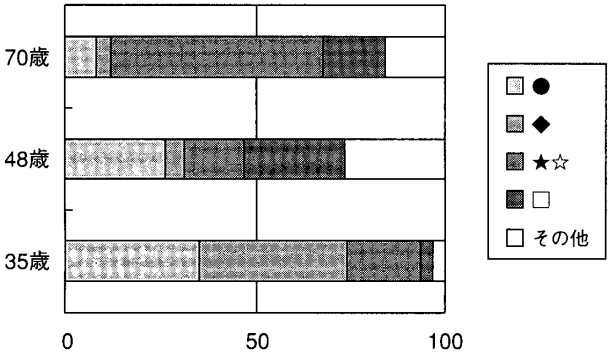
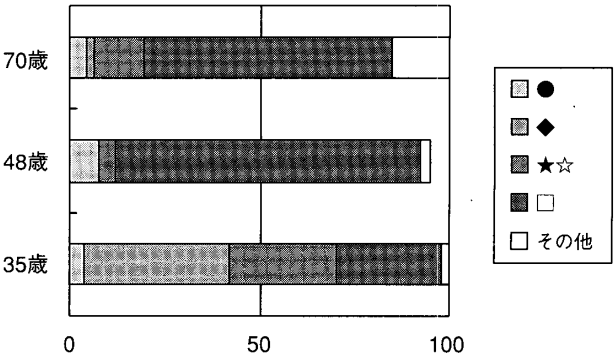


図9　外的条件可能　挟間町3世代



ここでは、世代①②の使い分けに合せて、★と☆をまとめてある。この結果とこれまでの考察を合せて、以下の表に3世代における可能表現の変遷を示す（表6）[8]。

表6

3世代における可能表現の変遷	世代①　70歳	世代②　48歳	世代③　35歳
心情・性向と能力による可能(不可能)	●★☆	●	●◆★
内的条件可能（不可能）	★☆	●★□	●◆★
外的条件可能（不可能）	□	□	◆☆□★

世代①②③の★☆を見ると、「心情・性向」と「能力」[9]から「内的」へ、さらに世代③では☆が「外的」へと意味を変化させていることがわかる。九州方言研究会（1969）[10]の調査結果から、

●キルは1964～65年当時の15歳（中学３年生）の世代に「能力」として定着しつつある新規の形式と読み取れる。

世代①の年齢からすると、●の入ってきた時期には成人していたので、その前の表現が★☆であったということになる。先行研究では「能力」の●の前は◆（ただし下二段活用）という報告があるので、当該地域の方言では動詞の語幹に一律にレル（レン）あるいはレレル（レレン）を添加する変化があったのだろうと推測される。その★☆は、●が福岡県や熊本県から侵入してくるにつれて「能力」から「内的」へと意味を変化させざるを得なかった。前掲図２の可能の条件スケールに従えば、右方向への移動である。

さらに世代②になると、★の担当する「内的」の意味領域は狭くなり、発話主体の体調・気分・体力の不良による不可能に限られてしまい、他は●と□の両脇の担当形式に分断された。

世代③はもっと複雑な様相を呈している。全国共通語としての◆（下一段活用）が全体を覆って、いわばオールマイティ（全能）として振る舞っている。一方、★は可能（不可能）における発話主体の主情性（強い感情）があることを示すという機能を強化した形になって、「内的」のみを表す形式ではなくなっている。また、□は◆とそのペアとしての☆に押され、「外的」の形式から衰退の様相を呈している[11]。

最後に、可能表現における３項対立について。世代①では、「内的条件可能」という意味領域は確立していたと考えるべきだろう（図10）。しかし、確立していた期間は●の侵入時期を計算すると数十年前まででであったのではないか。世代②ではその意味領域が狭まり、発話主体と動作主体が一致した場合の「内的」となった。そこに主情性（話者の強い感情）が伴う条件が揃う。やがて世代③では可能の条件にかかわらず、その主情性を表す表現となってしまったため、「内的」の意味領域は●と◆が吸収している状態である。

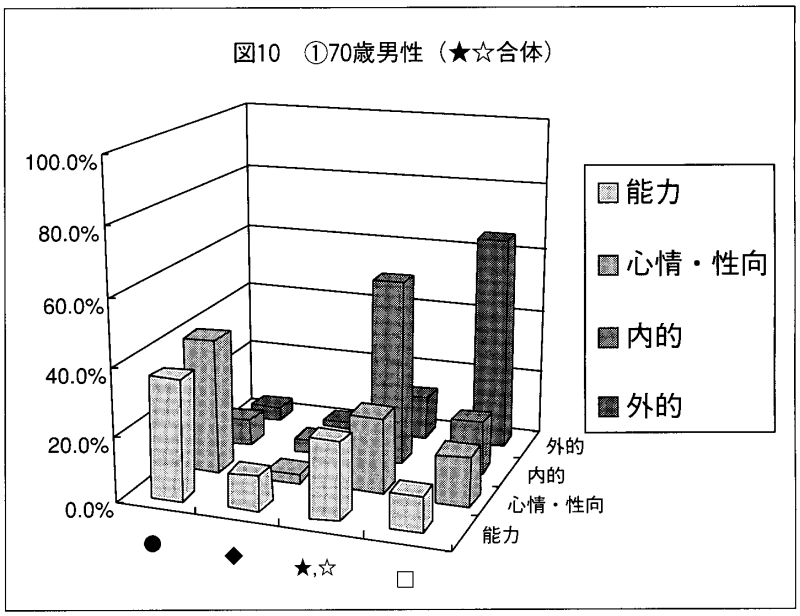


図10　①70歳男性（★☆合体）

これまで述べてきたように、世代①②と世代③では断絶があり、その契機となったのは共通語としての◆であることは間違いないであろう。その結果、「内的」という確立した意味領域は消滅しそうであるが、同時に意

8　以下、凡例再掲。●：キル／キラン、◆：可能動詞形（子音語幹動詞）、★：可能動詞の語幹＋（レ）レル／（レ）レン、☆：ラ抜き可能形（母音語幹動詞）、□：（ラ）レル・ルル／（ラ）レン、★☆：可能動詞あるいは母音語幹動詞の語幹＋（レ）レル／（レ）レン。

9　この２つの意味領域を合せて考えることについては検討を要するが、表６の分布が非常に近似しているので、今は合せて考察を行う。

10　『九州方言の基礎的研究』風間書房。拙稿（2001）「地域から発する可能表現の３区分化」『地域社会研究』第４号も参照されたい。

11　これは□の形式が、受身や尊敬の形式と同じであることとも関係していると思われる。可能の意味を外すことで、□の意味領域をより明確にすることができる。話者の中にこのような単純化・合理化の気持ちが作用していることが推測できる。

味領域にこだわらずに主情性を添加する★という現象が生じている。さらに「外的」の□の音変化としての☆も新しい現象である。

日本語全体が単純化を指向していることを考え合わせると、大分方言の可能表現は、今後共通語の影響を受けて、可能動詞とそのバリエーション（◆，★，☆）がより多く使われるようになることが予想できる。

【付記】今回の調査で話者として数度にわたる長時間の調査に協力してくださった3名の方に、お名前を記して感謝の意を表します。

小出　弥　氏　　柚野　武裕　氏　　佐藤　義朗　氏

また、常にお世話になっている大分郡挾間町役場の皆様、小出アサ子氏、これまでの調査にご協力いただいた皆様、以上の方々のご厚意・ご配慮に対しても同様に感謝いたします。

summary

The Change of the Expressions of Ability
－By a Comparison among 3 generations in HASAMA town of Oita-Gun, Oita prefecture－

Mika Matsuda

Key words : The meanings of Ability, An Ability to do, A Conditional Ability, Subjective conditional probability, Verb for ability, Speaker's Feeling about the Matter

There are precedent studies, which suggest there are 3 divisions in the expressions of ability in Oita dialect. But the studies are not generally accepted. This report investigates into the differences of the usage of the expressions of ability among 3 generations in HASAMA town, Oita-gun. The results are as follows.

(1) The form that expresses an ability to do has changed from "a verb for ability (yome-ru : can read)"to "-kiru (yomi-kiru)".

(2) "A verb for ability" has changed its meaning from "an ability to do" to "subjective conditional probability". The form has changed from "yome-ru" to "yome-re-ru".

(3) The younger generation (Age 35, male) uses the form, "-re-ru", for expressing their feelings. For instance, "yome-re-ru" for joy, yome-reN for regret. This is another meaning, which cannot be included in the 3 divisions of the expressions of ability.

(4) －reru form (yoma-reru) of a conditional ability is going out of use.

(5) The change has occurred in the last 30 years.